
ロシア史研ニューズレター

ОБЩЕСТВО ИССЛЕДОВАТЕЛЕЙ ИСТОРИИ РОССИИ
No.110

July 2018

ロシア史研究会2018年度大会案内 首都大学東京（南大沢キャンパス） プログラム決定

すでにお知らせしましたように、ロシア史研究会2018年度の大会は、10月13日（土）、14日（日）の両日に首都大学東京で開催されます。

大会プログラムの概要をお知らせします。個々の報告の要旨については、次号に掲載予定です。

なお、大会に関する事務的な事項でのお問い合わせは、ロシア史研究会事務局（shukran_afwan@hotmail.com）宛にお送りください。



（会場となる首都大学東京南大沢キャンパス1号館）

【2018年第62回ロシア史研究会年次大会プログラム（仮）】

於：首都大学東京南大沢キャンパス1号館

※タイムテーブルは変更の可能性があります。

10月13日（土）		
	A会場 自由論題報告	B会場 自由論題報告
10:00 ～10:55	李優大「ソヴェト・ロシアと「グレートゲーム」—イランをめぐる国際関係に焦点を当てて（仮）」 コメンテータ：吉村貴之	なし
11:00 ～11:55	Peter Waldron, “Cultural Diplomacy and the Cold War: the UK-USSR Cultural Agreement” コメンテータ：藤澤潤	調整中
11:55 ～13:30	昼 食（委員会）	
13:30 ～16:00	共通論題A 「ロシア・ソ連の記憶と政治」 高橋沙奈美「報復と受難のあいだ—ニコライ二世一家暗殺の記憶と聖化（仮）」 立石洋子「ロシアにおける国家の歴史と地域の歴史、個人の歴史（仮）」 ティムール・ダダバエフ「中央アジアにおけるソ連時代の記憶とその理解」 コメンテータ：伊東孝之	
16:15 ～17:45	総 会	
18:00～	懇親会（生協食堂）	

10月14日（日）		
	A会場 パネルA	B会場 パネルB
10:00 ～12:00	「新史料から見直すシベリア出兵」 エドゥアルド・パールイシェフ「白系諸政権と日本—武器供給問題を中心に」 長興進「『チェコスロヴァキア日刊新聞』は日本の「シベリア出兵」をどのように見ていたか」 兎内勇津流「ヴァシーリー・ボルディレフと日本軍」 原暉之「ロシア在留日本人のシベリア出兵批判」 コメンテータ：中嶋毅	「近現代ロシアにおける家族・教育とジェンダー（仮）」 畠山禎「「大改革」後のロシアにおけるジェンダー秩序の変容—家庭性（domesticity）を中心に（仮）」 河本和子「ソ連における財産と家族—法制度と裁判例から（仮）」 五十嵐徳子「「女らしさ」、「男らしさ」を求めるロシア（仮）」 コメンテータ：瀬地山角
12:00 ～13:30	昼 食	

13:30 ～16:00	共通論題B 「明治維新とロシア」 山添博史「幕末維新期におけるロシアの東アジア外交」 麓慎一「明治維新とサハリン島問題」 竹中浩「明治維新と大改革—日露比較近代化論の現在（仮）」 コメンテータ：左近幸村
-----------------	---

【事務局からのお知らせ】

大会時の託児について

昨年度の総会で承認されましたように、今年度の大会でも会場内託児および託児補助を実施予定です。すでに会場隣の建物を押さえております。大会2か月前ごろにMLにおいて告知し、1か月半前までに申請を受け付けます。利用料金はじめ諸要領については昨年度に準じます。ご質問がありましたら、事務局鶴見までお気軽にお寄せください。

【4月例会レポート】

○ロシア史研究会・東欧史研究会合同シンポジウム傍聴記

前川陽祐

2018年4月28日、津田塾大学千駄ヶ谷キャンパスにて、ロシア史研究会・東欧史研究会合同シンポジウム「ロシア・東欧の第一次「戦後」—移動する人びとの視点から—」が開催された。50人以上が集まるなか、長與進、エドワルド・パールィシェフ、江口布由子の3氏による報告、高尾千津子氏によるコメントののち、フロアも交えた総合討論が行なわれた。以下、3氏の報告の要旨をまとめ、それぞれに筆者の感想を簡単に付け加え、最後にシンポジウム全体について述べたい。筆者の不勉強や不見識に基づく誤解もあろうかと思うがご容赦されたい。

長與氏は、ロシア内戦期にチェコスロヴァキア軍団が発行していた『チェコスロヴァキア日刊新聞』を素材として、同紙がポリシェヴィキやメンシェヴィキをはじめとした社会主義派や、コルチャークやセミョーノフらの「白軍」——長與氏はこの呼称に異議を呈しているが——をどのように報道していたのか、詳細に提示した。そのうえで同氏は、「ロシア革命」の性格づけに関して、「十月革命」だけに収斂させるのではなく、1917年2月の帝政崩壊から1922年12月のソ連成立までの間の「旧ロシア帝国領域内における中央政府権力をめぐる諸党派のせめぎあい」としてとらえることを提唱した。これは筆者にはかなりインパクトのある提言に思われたのだが、コメンテーターの高尾氏は、1922年12月を終点とするような革命のとらえかたは、「十月革命の成就としてのソ連成立」という意味でかえってソ連史観的ではないだろうか、と述べた。

パールィシェフ氏は、ロシア革命後の「在外（亡命）ロシア」研究の一環として、プラハの亡命ロシア人が設立した「ロシア在外歴史文書館」（RZIA）の活動を、四つの時期に区分してあつづけた。パールィシェフ氏によれば、RZIAの活動はバルビンや上海を拠点として中国・日本といった極東にも及び、亡命ロシア人のネットワークを駆使して膨大な資料が集められたのだという。筆者としては、RZIAの活動が、——マルクス主義派や右派ではなく——エスエルやカデットと強い結びつきを有していたという指

摘は、とりわけ興味深かった。しかしそれと同時に、プラハに本部をもつ RZIA がなぜ遠く離れた極東の資料まで集めようとかくも尽力したのか、気になるところだった。同様の点は、高尾氏も「在外ロシア」の地域的・階級的多様性をめぐる議論と関連して指摘していた。

江口氏は、第一次世界大戦後のオーストリアにおける婚外子の権利問題——とくに、外国籍の父親に対する扶養費請求の問題——という一見ミクロな事例を、東部戦線における第一次世界大戦の持続性、および各継承国におけるハプスブルク帝国の持続性（「小帝国としての各継承国」）、国民化といったきわめてマクロな観点から考察した。報告のむすびからは、「暴力性」や「男性性」をめぐる問題への射程もうかがえた。婚外子保護をめぐる、国家による介入・民間委託・国際協力など様々なファクターが複雑に交錯する様が筆者には印象的であった。ただ、カトリックが中心のハプスブルク帝国で諸外国と比べて婚外子が多かったのはなぜか、というのが筆者の素朴な疑問だった。

本シンポジウムに接して改めて感じたのは——東欧史研究会委員長の吉岡潤氏が開会の辞で触れ、ロシア史研究会委員長でもある高尾氏もコメントで強調していたが——「東欧とロシア（革命）」という視座の重要性である。長與氏とパールィシエフ氏の両報告はまさしく「東欧とロシア（革命）」を扱ったものである。一方、江口氏の報告で提示された「第一次世界大戦や帝国の持続性」という観点は、旧ハプスブルク帝国の領域だけではなく、旧ロシア帝国の領域にも、かなりの程度適用できるだろう。ドイツ近現代史を専攻しながらも東欧史研究会委員を務め、ロシア史研究会にも——長らく幽霊会員ながら——所属している筆者にとって、本シンポジウムはきわめて示唆的かつ啓発的であった。本シンポジウムが、昨年 12 月の合同例会に続いて、これまで乏しかったとされる両研究会の交流の活性化につながることに強く期待している。



（4 月例会の様様 左：長與氏、右：パールィシエフ氏）

○ロシア史研究会・東欧史研究会共催シンポジウム参加記

中嶋 毅

本年 4 月 28 日、ロシア史研究会と東欧史研究会との共催で開催されたシンポジウム「ロシア・東欧の第一次『戦後』—移動する人びとの視点から」に参加した。このシンポジウムでは、「『チェコスロヴァキア日刊新聞』は「ロシア革命」と内戦をどのように報道したか」（長與進氏）、「プラハのロシア在外歴史文書館（RZIA）の活動（1923～1945 年）と資料にみられる極東諸地域の亡命ロシア人社会」（エドワード・パールィシエフ氏）、「国境の経験—第一次世界大戦直後の中東欧における国籍と親子関係」（江口

布由子氏)の三報告がおこなわれた。開催校の津田塾大学千駄ヶ谷キャンパスは真新しい校舎で、会場となった大教室には多数の来場者が参集しており、シンポジウムへの関心の高さがうかがわれた。

長興氏は、ロシア内戦において極めて重要なアクターであったチェコスロヴァキア軍団が1918年から20年のあいだ発行していた日刊新聞の記事の分析を通じて、チェコ軍団がロシア革命とその後の内戦をどのようにとらえたかを考察した。ロシア内戦を総体として検討するうえでチェコ・ファクターの重要性を示した興味深い報告で、本研究会と東欧史研究会との合同シンポジウム報告にふさわしいものであったと思う。

バーリシエフ氏は、ロシア革命後にプラハに亡命した人々が組織したRZIAが未公開個人文書を収集した経緯を、極東地域を事例として具体的に検討した。RZIAの後継機関であるチェコ国立図書館スラブ図書館には、この個人文書は所蔵されていない。それは、1945年にチェコスロヴァキア政府からソ連政府に譲渡されたため、現在はロシアのいくつかの文書館に分散所蔵されている。バーリシエフ氏はその来歴を探索し、RZIAが文書収集のために世界各地にネットワークを形成していたことを明らかにした。当然のことながら、文書館資料の形成にも国や地域を超えた歴史があったのである。

江口氏の報告は、旧ハプルブルク帝国の解体によって外国籍となった父親に対して、その婚外子の権利保護を目的とする扶養費請求手続きを事例に、新たな国境線の出現によって生じた「国家と国民」の関係を考察するものであった。分析視角はユニークだが、私自身の知識不足に加えていくつかの論点が複雑に重なり合っているようで、報告者の主張が必ずしも明確には伝わってこなかったように感じた。

報告後の質疑応答では、長興報告に対して『チェコスロヴァキア日刊新聞』の政治的性格をめぐって質問された林忠行氏との間で交わされた議論が圧巻であった。チェコ軍団史研究をリードするお二方の議論を十分に理解できたわけではないが、チェコ軍団が様々な情報網を精力的に収集して行動していたことを知ることができた。チェコ軍団を視野に入れた内戦史は原暉之氏の先駆的業績がほとんど唯一のものといつてよいが、革命と内戦を本格的に再考するうえでロシア史研究者と東欧史研究者との共同作業が必要になるように思われた。

本研究会と東欧史研究会が共同で研究会を開催した例は過去にもあったが、第一次世界大戦とロシア革命をテーマに大規模なシンポジウムが開催されたのは、これが初めてではないかと思う。当該期の歴史の多様な側面に触れるとこができた今回のシンポジウムは、私自身にとっては得るところ大であった。シンポジウムを組織された関係各位のご尽力に謝意を表すとともに、今後の新企画も希望したいと思う。



(4月例会の様 左：江口氏、右：全体の様子)

【5月例会レポート】

○池田 嘉郎『ロシア革命——破局の8か月』ロシア史研究会合評会（2018年5月6日青山学院大学）に参加して

根村 亮

報告者に我が国のロシア革命研究を牽引してきた和田を迎えたことは、著者池田にとっても幸運なことであつたらう。まず報告者は、我が国では1917年のロシア革命を扱った新書が長いこと出ていないことを指摘し、本著がその欠落を埋めると共に、臨時政府というこれまで注目されてこなかった題材を取り上げて、新鮮な叙述が提供されている点を高く評価した。特に我が国では10月革命必然論が前提となっていた中で、別の視点を打ち出した点を賞賛した。他方「なぜボリシェヴィキは成功したのか」という問いかけについては、それがボリシェヴィキの権力奪取をいうのか何かを成し遂げたことをいうのか明確ではないと指摘した。その後報告者はこれまでの日本およびロシアにおけるロシア革命史へのアプローチを短くしかし正確に追いながら、池田の叙述の特徴を解明していった。字数の関係ですべては紹介できないが、ペテルブルクで刊行されたロシア史研究者へのアンケート集によれば、臨時政府の失敗として、戦争を止められなかったことを挙げている数少ない歴史家が池田と和田であつたそう。また歴史における個人の役割を強調する点でも二人は共通しているようだ。だが報告者は、そもそも2月革命を回避する可能性の存在を挙げ、またケレンスキーが戦争継続を考えた理由をもう少し掘り下げるべきであり、さらには臨時政府にこれだけ戦争反対論があつたのになぜ回避できなかったのかを考えることがこれからの課題であると主張した。他方池田のリプライの中で注目されたのは以下の点である。まず新書版という久しぶりの一般向けの革命史をめぐる本であることは、かなり意識されており、専門家には岩波の5巻本の近刊書を合わせて読んで欲しいとのことであつた。そしてその第一巻で10月革命を論じているブルダコフにかなり影響を受けているということであつた。またケレンスキーについては、戦争を通じて兵士を市民に育てるといったことを考えており、彼にはその自信があつたのではないかと主張していた。

続いて質疑応答が行われたが、まず松里からH.G.ウェルズの『影のなかのロシア』で現れるロシアが招いたスチヒーヤを押さえ込めるのは極右か極左だけだったという伝統的なロシア観と池田のロシア革命論は、あまり変わらないのではないかと疑問が出たが、池田はその通りであるが、我が国ではボリシェヴィキ史観が支配的で別の伝統が存在していたことを指摘した。次に松戸が二つの問題点を挙げた。第一は、臨時政府が戦争を離脱すること自体が無理ではないのか。池田自身の叙述もむしろそれを物語っているのではないかと疑問である。これに対して池田は、確かにいきなり停戦することは困難であるが、いい加減に継続して連合軍諸国を納得させつつも、徐々に離脱をうかがう戦術をとることは可能だったはずであると応答した。要するに池田からすると、むしろ臨時政府の失敗はボリシェヴィキを野放しにしたことだということになる。また松戸は、池田がロシア革命の特殊性の前提としている公衆と大衆の分離というテーマは、ロシア独自のものとは言いがたく、フランス革命当時のフランスでも同様な現象があつたのではないかと問いかけ、池田はフランス革命期のブルジョアほどロシアのブルジョアは育っていないと反論したが、報告者和田はこの点に触れ直して、フランス革命とロシア革命の状況はむしろ似ているが、国際的な状況が異なるのではないかと主張した。さらに左近からはロシア革命と辛亥革命の親近性をどう考えるかという質問が飛び、それぞれの革命の類似と相違という問題の難しさが浮かび上がった。

全体としてみると、ロシア革命を考察した一般向けの本が意外になく、むしろボリシェヴィキ中心史観が常識のように思われがちな日本の特殊環境の中で、新しく新書を書

き、一般読者にコンパクトにこれまでとは違うロシア革命像を提示するというとても難しい課題を、池田が見事に果たしたことは確かであるが、100年を経てもロシア革命史の研究はまだ奥が深いことを再認識させられた。

最後になるが、このところ例会活動がとても活発になっており、例会係の方々のご苦勞に感謝したい。



(5月例会の様様 左：全体の様子、右：評者の和田氏と著者の池田氏)

【3月13日委員会議事要旨（於青山学院大学・青山キャンパス）】

1. 大会関連
2. 会員名簿について
3. NL電子化について
4. 委員の補充について

【5月6日委員会議事要旨（於青山学院大学・青山キャンパス）】

1. 大会関連
2. 大会出欠ハガキの電子代替について
3. 本会ウェブサイトの雑誌ページについて
4. 雑誌の印刷について
5. 新任委員について

【新委員の紹介】

青島陽子会員と畔柳千明会員が、新たに委員として加わりました。

青島 陽子

- ・委員会での担当：雑誌編集委員
- ・所属：神戸大学大学院国際文化学研究科
- ・専門分野：帝政期ロシア史
- ・委員としての抱負：どうぞよろしくお願ひいたします。

畔柳 千明

- ・委員会での担当：ニュースレター
- ・所属：東京大学大学院総合文化研究科博士課程
- ・専門分野：露清関係史
- ・委員としての抱負：例会等でお世話になります。どうぞよろしくお願い致します。

ロシア史研ニュースレター
第110号 2018年6月25日発行
編集・発行 ロシア史研究会委員会
(井上岳彦 畔柳千明)
〒153-8902
東京都目黒区駒場3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科
地域文化研究専攻 鶴見研究室気付
